丘の火

# 丘の火

文藝春秋刊

丘の火　奥附
昭和五十五年九月三十日　第一刷

定　価　一七〇〇円
著　者　野呂邦暢（のろくにのぶ）〈著作権継承者　納所長雄〉
発行者　杉村友一
発行所　株式会社文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三―二三　郵便番号一〇二
電話東京（〇三）二六五局一二一一
本文印刷　理想社印刷所　附物印刷　大日本印刷　製本　大口製本
製函　加藤製函
万一落丁・乱丁の場合はお取替えいたします

© Nagao Nōsho　Printed in Japan

# 丘の火

〈純文学長篇小説〉

# 解題

文學界昭和53年2月号より昭和55年4月号まで連載（うち昭和54年10月号は休載）なお、函、表紙、扉の著者名は自署を使用した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

# 第一章

伊奈伸彦は背広を着て鏡の前に立った。
洋服箪笥の扉の内側についている鏡である。上半身を映してみるために数歩さがった。
濃紺の地に赤い縞のチェックが入っている。去年、西海印刷に採用されたとき、有り金をはたいて仕立てさせたものだ。煉瓦色のセーターに合せると、すこし派手のようでもある。伸彦は他の上衣をしらべた。袖口がほころびたり、肘のあたりがすりきれたりしているものばかりだ。きょう会う人物と用件のことを考えれば、着てゆくのはこの背広しかない。
伸彦は背広を脱ぎセーターを脱いだ。伊佐市のような地方都市では、広告代理店の社員は、割と派手に装う必要があった。やめて一カ月たった今もその習慣が残っているのに気づいた。抽出しをあけてシャツを探した。青い地にストライプの入ったシャツを取り出した。アイロンがかかっていない。伸彦は舌打ちした。三面鏡に向っている英子を見た。舌打ちは聞えているはずだが、英子は鏡をのぞきこんでいっしんに口紅を塗っている。
伸彦は抽出しのシャツのなかからようやくアイロンのかけてあるものを見つけた。体に合うかどうか気になった。しばらく着ていない。むりをしてボタンをはめた。袖口のすこし上に虫喰いの穴があった。腹にも肉がついている。きゅうくつだが我慢することにした。パーティーで、まさか腕をふりまわすことはないだろうと思った。
ネクタイはグレイに赤の縞が入ったのを選んだ。学生じみた白いシャツにはそれしか合わないように思われた。しかし、鏡に映してみると新入りの銀行員のように見える。四十歳の男にふさわしい身なりではない。伸彦はあらあらしくネクタイをほどいてかわりを物色した。
あれこれと選んで結局、空色の無地をしめることにした。三面鏡から目をはなさずに英子が声をかけた。
「お帰りは何時ごろになるの」
「わからない、話はどうせ菊池さんの新社長の就任パーティーのあとになるだろうから」
「じゃああたしを迎えに来られるかどうかわからないということね」
「二次会三次会につきあうかもしれない、菊池さんにひきとめられたら断わるわけにはゆかない」
「一人で帰れるわ」
「そうしてくれ、しかし早目に用がすんだら店の方へ……」
「あたしもきょうは遅くなるかもしれないの」

「どうして」
「それはきかない約束だったじゃない」
英子ははじめて伸彦を見た。口紅を濃くひいている。このごろ化粧が厚くなった、と伸彦は思った。英子はスナックで働くようになってからそうなった。めったに買わなかった装身具も買うようになった。伸彦は青いシャツをハンガーにかけていった。アイロンをかけておいてくれ、いつでもいいから。英子はちらりとシャツを見てうなずく。
「きょう、着てゆくつもりだったんだ。しわくちゃではどうもね」
「もっと早くいってくれればいいのに」
「かけてあると思ったんだ。アイロンをかけないでしまうなんてこと今までしなかったろう」
「あたし忙しいの、わかってるでしょう」
「店はこのごろ繁昌してるそうじゃないか」
「そうでもないわ」
「忙しいといってただろう」
「慣れないお仕事ですもの、客商売というのは気疲れするものなの、こんなにくたびれるとは思わなかった、お給料を上げてもらっても……」
「上げてくれたのか」
「別に上げてくれたというよりアルバイト並の給料から昇格したていど、生活のこと考えてくれたの、マネージャーが」
英子は三面鏡を閉じた。二人はアパートの裏庭にとめてある自動車に乗りこんだ。「――さんがね」と英子は管理人の名前をいい、露天駐車は困る、裏庭には近くもう一棟のアパートが建てられることになっているから伸彦の自動車を移すように要求した、と告げた。伸彦が夜おそく帰ったとき、エンジンをふかす音がうるさいと近所の住人から苦情も出ていると英子はつけ加えた。
「きょうの話がうまく実を結んだら有料駐車場を借りられる」
「いい話というのはたいていこわれるものなのよ」
「きみにも店をやめてもらう」
英子は、答えなかった。カーディガンの前を合せ、両腕で胸を包むようにしている。すきま風が吹き入った。この自動車は中古車のディーラーから手に入れて三年たっている。ドアはきちんとしまらないし、揺れもはげしい。エンジンの調子もおかしい。どうやら走るのが不思議なような車だ。
伸彦はいつもの所で英子をおろした。スナックよりも五十メートルほど手前である。フロントグラスごしに英子の姿を目で追った。今年、三十歳になった女とは思えない身ごなしの軽さで、舗道の人ごみを縫って歩く。勤めに出だしてから英子は若やいだようだ。背後の警笛にせき立てられて伸彦はアクセルを踏んだ。この中央通りは駐車禁止である。スナックのある十字路で右折し、町の東へ自動車を

走らせた。

新社長就任のパーティーが催される菊池家は伊佐市の北にある。中央通りからまっすぐに北進すれば七、八分で着くのだが、途中に勾配の急な丘がある。いたみかけたエンジンが息をつくおそれがあった。いったん東へ迂回して勾配のゆるやかな坂道を選ばなければならない。踏切りには遮断機がおりていた。列車が通過するのを待つ間、煙草に火をつけた。何気なくルーム・ミラーに目をやった。顎に剃り残した髭がまばらに認められた。遮断機があがった。伸彦はつま先に力を入れた。話が具体化すればもっとましな自動車に買い換えられる。同じ中古車でもこれよりいいのがいくらでもある、と思った。

前方から走って来たモーターバイクの男が、すれちがいざま片手を水平に突き出してそのこぶしをぱっと開いてみせた。伸彦はあわててライトを点けた。五時をややまわったばかりというのに夕闇が濃い。中央通りを走っているときはアーケードの照明で気づかなかったのだ。

次の瞬間、伸彦は思わず後ろをふり返った。

(あの男……)

手を突き出してこぶしを開くという合図はだれでも知っている合図ではない。あわててブレーキを踏んだ。自動車はガードレールに横腹をこすりつけてとまった。モーターバイクに乗った男は夕闇にまぎれて見えなくなっている。二十年来ついぞ見たことのない合図である。

いつのまにか煙草の火が消えていた。伸彦はそれを灰皿に押しこみ、新しい煙草に火をつけた。何台もの自動車が彼を追いこしていった。モーターバイクにまたがった人物は小ぶとりの中年男のようだった。ゴーグルをかけていたので人相はわからない。この町に知人は少いし、かりに知人だったとしても夕方、路上から車内燈を消した自動車を運転している者を見わけたとは思えない。先方も無燈火で走っている自動車を見てとっさに合図したのだろう。

伸彦は煙草を吸い終ってから五分間あまりじっとしていた。自分のすごして来た二十年を考えた。一つとして永続きしない仕事、妻との生活でさえも。

もしかしたら仕事に飽きっぽいのは父親ゆずりの気質ゆえかもしれない、と伸彦は思った。(お前を見てるとお父さんを見てるような気がするよ、お父さんも兵隊にとられるまでは腰の座らない人でねえ)。三十歳をすぎても定職につかない伸彦に非難がましく母が語ったのを思い出した。父のことをめったに話題にしない母だったから、(腰の座らない人)という父の性格を聞いたのはそのときが初めてだった。

伸彦がこの町へ来て一年経とうとしている。義父のつてで印刷会社に就職して半年でやめ、次に広告代理店に採用されたのだが、そこも三カ月と続かなかった。最初のうちはどこの職場でもまじめに働くつもりでいるのだが、しばらくするとやる気をなくしてしまう。その反復である。し

かし、今度はちがう。菊池省一郎は菊興商事という伊佐市では指折りの企業を経営する人物である。依頼された用件を首尾よく果せば、あるいは永続的な地位を与えられるかもしれない。それは伸彦の空頼みではなくて先日、菊池がはっきりと約束したことでもあった。

舌が荒れていた。その舌で唇をなめた。秋の終り、大気は乾燥している。どこからか冷たい風が吹きこんで来る。朝からむやみと吸い続けた煙草のせいで咽喉が痛んだ。ダッシュボードから罐入りドロップスを取り出して口に含んだ。煙草をのみすぎるとすぐに咽喉を傷める。わかっていてもやめられない。失業してから喫煙量がふえたようだ。終日いらいらとして考えごとにふけっている。以前は伸彦が煙草を吸うのにあれほど口やかましかった英子も、最近は何もいわない。

彼が煙草に火をつけると、窓の方へにじり寄って細めにあける。台所へ立って洗い物にかかったりする。そういう英子を見ると伸彦はなおさら煙草を吸いたくなる。口が臭う、といって英子は顔をそむけた。二人でテレビを見ていたとき、伸彦はふと英子の耳たぶを目にとめた。家でははずすのがきまりのイヤリングをつけたままにしている。

型も見なれないものである。目を近づけてよく見ようとしたとき、英子がそうと気づいて顔をそむけたのだった。耳たぶに孔をあけている。痛くはないのか、と伸彦はきいた。ちかごろはだれでもしている、というのが英子の答だった。

(あなた歯をみがいてるの、汚れてるわ)

(煙草のせいだ)

(だからていねいにみがかなくては)

伸彦はテレビから目をそらして天井を見上げた。汚れているのは自分の歯だけではない。畳、窓の桟、鏡台などもうっすらと埃をつもらせているように見える。英子は神経質なほど部屋の清潔に気をつかう性分で、それは働くようになってからも変らない。朝はたっぷり一時間をかけて念入りに掃除する。

しかし、どうしたことか最近は室内にあるものがことごとく埃っぽくなったような気がして仕方がない。伸彦がけさ窓のカーテンを勢いよくあけたとき、もうもうと埃が舞いあがったように思われた。朝から晩まで家のなかにいるので埃ノイローゼにでもなったのだろう、と考えることにした。英子の掃除する時間は前より短くなっていないのである。

赤い光がふられている。

懐中電燈を手にした作業員のけわしい表情がライトのなかに浮びあがった。ぼんやりと走っていたので途中の標識を見おとしたのだ。交通量がへったのは知っていたが、道路工事ちゅうであることは忘れていた。伊佐市の東から北

へ抜けるバイパスが拡張されることは前から知っていたのだ。いつもなら伸彦はこういう事情を前もって考えに入れた上で運転経路を決めるのだが、さっきモーターバイクの男とすれちがってからは、心のどこかにぽかりと空白が生じて頭が普通の状態ではない。

腕時計を見た。大急ぎで自動車をUターンさせた。パーティーの始る時刻まで五分しかない。それから伸彦は何も考えなかった。ハンドルにかぶさるようにしてひたと前方に目をすえ、来た道をいったん逆戻りして伊佐市へ這入り西へ抜けて、けたたましくクラクションを鳴らしながら旧市街の細い裏通りをジグザグに走り、黄から赤に変った信号燈のわきを速度をあげてすぎた。菊池家に着いたのはパーティーが始って間もない時刻だった。

伸彦は壁ぎわに身を寄せて広間の客たちを見るともなく見ていた。

手ぶらでは具合が悪いのでビールのコップを持った。さっき、菊池省一郎は伸彦を認めて近づいて来た。パーティーがはねたあとで書斎に来てくれといいのこして、そそくさと立ち去ったのだった。気がついてみると伸彦は上衣の袖をつまんで引っ張っていた。シャツにあいた虫喰いの穴を隠そうとしていたのだろうと思うと我ながらいまいましかった。

「県知事が……」

という声に伸彦はふり向いた。伊佐日報の記者である釘宮康麿が上半身をゆらゆらさせながら立っている。「……祝辞をのべてからさっさと退散するかと思ったら腰をすえてるじゃありませんか、あっちこっちに愛嬌をふりまいている所をみると何か思惑があるんだな」

釘宮は伸彦のわき腹を肘で小突いて目くばせした。かなり飲んでいる。この男はパーティーと名のつくものには必ず顔を出すという噂を伸彦は聞いていた。ただしパーティーといっても会費が要らない場合だけである。いつかは伊佐市の商店連合会が催した秋祭りの行列で、商工会議所の代表や婦人会の会長と肩を並べて歩いているのを見かけたこともある。人の大勢集る所にはどこかに釘宮がいた。

「今夜は伊奈さん、有明企画を代表して来たというわけですか」

伸彦はコップに口をつけて聞えなかったふりをした。会社をやめさせられたことを釘宮が知らないはずはない。盛大なパーティーですな、伊佐ホテルのボーイが半数以上も来ている、と感心してみせた。

「国会議員も来てます、県会の議長もね、市長をご覧なさい、禿げ頭をふり立てて泳ぎまわってる、酒を飲んでるときもあいつ次の選挙のことを忘れない男なんだ」

釘宮は歯をむき出して笑った。伸彦は煙草を買って来るといってその場を離れようとした。「煙草？　私のでよか

ったら吸いませんか、買うといったって丘を降りなければ手に入りませんよ」
伸彦は仕方なく釘宮のすすめた煙草の袋から一本を抜きとった。釘宮はすかさずライターの火をさし出した。
「おたくの社員も見かけましたよ、小池さんとか関口さんとか」
伸彦は煙草の煙にむせた。関口佐和子が来ているとは思ってもみなかった。釘宮は赤く充血した目で伸彦をみつめている。「どうかしましたか、伊奈さん」伸彦はぬるいビールを咽喉に流しこんだ。ネクタイをゆるめた。人いきれで肌が汗ばんでいる。
「あの人たちは招待されたんじゃなくて、有明企画の社長がパーティーの手伝いに供出を申し出たらしいですな」
釘宮の話を聞いて伸彦は社長の考えそうなことだ、と思った。菊池省一郎が社長に就任した菊興商事は有明企画のスポンサーである。供出とはうまいことをいう、と伸彦はすこし感心した。それとなく客の間に佐和子の姿を探した。
「あそこに……」
釘宮がゆび指した。「関口さんはほら階段わきに大きな花瓶があるでしょう。その向う側、失礼」
釘宮は上半身をゆらゆらさせながら空のグラスを持ってボーイの方へ遠ざかっていった。薔薇を活けた花瓶の後ろにちらりと佐和子らしい和服姿の女が見えた。グラスをのせた盆を持って客たちの間を縫い、すぐに見えなくなった。
伸彦が階段の方へ歩きかけたとき背中を叩かれた。重富病院の外科部長が立っている。
「伊奈さん、ここで会えるとは思わなかった」
重富悟郎は大声でボーイを呼び、水割りをとり換えた。片手でしっかりと伸彦の右腕をつかんでいる。
「招待されたのはおやじなんですがね、持病のマラリアが出て動けないんです、ぼくはだからおやじの名代というわけ、逃げなくてもいいでしょう、ぼくの話を少しは聞いて下さい」
「逃げるわけじゃない」
「最近は酒場にもあなたの姿を見かけたことがないから、ぼくの原稿なんか読んでくれるひまなんかありはしないだろうなあ」
伸彦は自分の腕から外科医の指をやんわりと引きはがした。重富は同人誌「漁り火」をほとんど自費でまかなっている。合評会を催しても自分の小説に対して同人が奥歯に物のはさまったような批評しかしない、と重富はこぼした。
「連中はぼくの小説をこきおろすと、ぼくが雑誌に金を出さなくなると思ってるらしいんです、下司の勘ぐりというものですな」
「院長先生はどうしてマラリアなんかにかかったんです」
「戦時ちゅうに南方で、おやじは軍医でしてね、ここの社長、いや前社長と同じ部隊だったらしい、戦争の話はあまりしたがらないんで詳しいことはぼくでさえ知らないん


此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

だ」

伸彦は重富院長を見たことがあった。印刷会社に働いていたとき、応接間から出てくる人物を認めた。痩せて小柄な老人であった。黄疸をわずらいでもしたかのように艶のない皮膚が濃い黄色を帯びている。あとで、営業主任から奇妙な話を聞いた。

重富院長は会社に自分の原稿を本にしてくれるように頼んだ。二百枚ほどの原稿である。印刷がすみ、製本にかかろうとしたとき、院長は会社へ訪ねて来て注文を取り消した。印刷ずみの紙は病院へはこぶこと、紙型は破棄することを要求した。予定していた五百部の代金は全額を支払った上での話であったから、会社としては何も損をするわけではなかった。院長の要求はかなえられた。

病院にはこばれた紙は焼却炉で灰になったという。（一枚のこらずだよ、あの先生が傍に立って目を光らせて監視してるんだ、会社には残っていないだろうなってくどいほど念を押すのさ、いやになっちまう、そんなに気がかりなら工場へ行って自分でしらべてみたらっていいたかった、せっかく注文しておきながら自分の本を煙にしちまうなんてどういう了簡なんだろ、札束を灰にするのとおんなじじゃないかね、もったいない）営業主任は金さえもらえれば焼こうとどうしようと注文主の勝手だがとつけ加えながら、自分には院長の気持がわからないといって首をふった。

数日後、また重富院長は会社へ来た。

文章の校正をするのに用いたゲラがあるはずだというのである。製本を中止したとき、だれかが不用とみなして、ゲラは棄ててしまっていた。院長はそれを探し出すように命じた。社員はぶつぶついいながら型通り探すふりをした。紙型を破棄した日に、ゲラも屑箱に入れて市営のゴミ処理場へ運搬したことを工場主任が思い出した。院長はそれを聞いてもなお疑わしそうに印刷機械の間を見まわしていたが、やがて会社を出ていった。伸彦は外国製の大型乗用車がゴミ処理場の方角へ走り去るのを窓ごしに見ていた。

何が書いてあったのか、と彼は印刷の担当者にきいた。

（憶えていません）

原稿の内容についてまで口止めされているとは思ってもみなかった。社長命令だという。そう聞けばますます知りたくなってくる。伸彦は注文をとってくるのが仕事で印刷には関係していなかった。それに重富院長の原稿を担当したのでもなかった。会社は名刺からカレンダーまで、およそ印刷できるものなら何でも受注する。新聞折込みのチラシ、園芸のカタログ、郷土史、PR用のパンフレット、個人の回想録などである。営業部の面々はいちいち原稿を点検しない。

伸彦は重富院長のゲラ刷りを校正した老人をある晩飲み屋に誘った。七十歳をすぎた元高校教師である。世間話をしながらそれとなく重富院長の原稿を話題にした。

（五百部も刷る予定だったのだから、人目に触れてさしつ

かえがない文章と思うんですがねえ、どうして校正刷りまで回収したのかさっぱりわからない）

老人に酔いがまわったのを見はからった上でそう切り出した。

（同感ですな、わしも不可解です）

伸彦は相手の盃に酒をつぎながら話を続けた。（しかも高い金を支払ってですよ、焼いちまうなら初めから本にしようなんて思わなければいいじゃないですか）

（医者は儲かりますからな、あのくらいの金なんかどうにでもなる）

（実はぼくも初校の段階でちょいと読んだんです。あのときは別に内緒でも何でもなかった）

（あなたが読んだ？）

（ええ、ざっとね、校正部の人に用事があったんで出かけたら席をはずしていた。高橋さんがチラシをやってるでしょう、彼を待つ間、ひょいとわきを見たらゲラが拡げてあったんで退屈しのぎに目を通したってわけ）

（四校までとりました、ふつうは再校がいいところですがね、昔風の文章で漢字も多いし、それは先生の意向です）

（そうそう変った文章だった）

（あなた社長命令が出たのは知ってるでしょう、読んだのなら何もわしにカマをかけるには及ばない）

（いえね、どうということのない内容なのに回収しちまった魂胆がわからないので）

（わしにそれをきいてわかるとでも思ってるんですか、与えられた仕事をした、それだけのことですよ、先方にも都合というものがある、ちゃんと費用は支払っています、とやかくいうことはない）

（金の問題じゃない、金さえもらえればそれでいいというものではないんですよ、われわれ営業としましてはね、ぼくは不愉快だな、さしさわりのある原稿なら大事にして金庫にしまっとけばいいんだ、あの態度は何です、社員の屑籠までしらべさせたときの目付、金をくれれば何をしてもいいというんですか）

伸彦も酔いのせいで声が高くなった。

（あなた何年うまれ？）

（昭和十二年です）

（日華事変の始った年だな、戦争を知らない）

（知ってますよ、敗戦の年は小学生だったんだから）

老人は頬を歪めた。小学生ね、といって子供に戦争がわかるわけはない、とつぶやいた。勘定は伸彦が払った。結局、その夜は何の収穫も得られずに終った。しかし、伸彦にしても焼かれたゲラ刷りには通りいっぺんの好奇心を抱いていたにすぎなかった。老人や植字工が口を割らない以上、きき出すすべはないのだった。それ以来、重富院長のことは忘れていたのだが、息子の顔を見て思い出すことになった。

広間の一角は総ガラス張りになっている。
伸彦は客たちのざわめきを背に伊佐の市街地を眺めていた。菊池家は丘のいただきにある。町を一望のもとに見おろすことができる。一年ほど前、伸彦がこの町へ移って来た頃と比較すればたいした変りようだ。県庁が近く伊佐市へ移転するという。九州横断道路が市街地のはずれに通ることが決っている。二万人を収容する住宅団地も建設される。人口十万足らずのひっそりとした城下町が何やら活気のようなものを帯びるのも当然だ。引っ越した当時はなかったデパートも町の中央通りに出来た。
伸彦が移住して来たのはしかしそういう町の事情とは無関係だった。
隣県で百科事典のセールスをしていたのがくびになり、妻の実家が伊佐市にあったので越して来ることになった。英子の父がこの町にあるJ銀行の支店長であった。印刷会社に就職したのは彼の口ききによる。
(もうそろそろ落着いていい頃じゃないかな)
就職が決った日の晩に義父は伸彦たちを食事に招いた。
(生活をちゃんと確保した上でないと、やりたいこともやれない、万事それからの話だよ、わたしのいうことは間違っているだろうか)義父はたて続けに盃をあけながら伸彦と視線をまじえないようにしてしゃべった。
(あそこはうちと取引きがあるからわたしの紹介だと断わるわけにはいかない、ちょうど営業に腕の立つのが一人欲しいと思ってた所だといって承知してくれたわけだがね、きみの年齢を聞いて社長は困った顔付だった、せいぜい二十七、八と思ってたらそれより十以上も齢をくった男だったからだろう、としにふさわしい給料は出せそうにないというから、サラリーの件は先方の一存にまかせるという条件で頼んだわけだ)
義父が意見めいたことを口にするのは初めてだった。伸彦は黙って酒を飲んだ。
(幸いあの会社は経営基盤がしっかりしている。社長が苦労人でね、苦労人といえばきみもいろいろやって来たんだなあ、職種を数え上げると十二、三になるんじゃないか)
(ええ、まあ……)
(世の中にはあれこれと仕事を変える男はめずらしくない、変えていけないという法はないんだからね)
(このたびはいろいろと……)
(仕事というものは何であれ退屈なものだよ、遊んで暮せるなら働くには及ばないが、そうもゆかない、きみが本当にうちこむことのできる仕事というのは何があるんだろうか)
伸彦は黙っていた。これこそ自分の天職だと思った仕事はひとつもない。何をしているときも他に自分にふさわしい仕事があるのではないだろうかと考えてしまう。気がついてみると二十年ちかく経っていたわけだった。

（きみたちに子供がなかったということも理由のひとつだと思う、子供がいたら仕事にやる気をなくしてもやめられはしないから、ま、それが幸いというべきか不幸というべきか問題だろうな）

義父はため息まじりにいった。何事も辛抱だとつけ加えた。

（わかっています）

（きみ、まだこれからだよ、いつまでも平社員のままでいるはずはない。社長にも人を見る目がある、悪いようにはしない）

義父の前では一言も口をさしはさまなかった英子が、帰りのタクシーのなかで伸彦にきいた。（あなた、本当に父の言葉がわかっているの）伸彦は目を閉じて体をシートに埋めた。車の揺れが不快だった。酔いが熱い塊りになって胃のあたりにわだかまっている。

どうしてそんなことをきくのだ、と伸彦はいった。これからの仕事が永続きするとは思えない、と英子はいった。英子の予感は的中したことになる。伸彦は入社して半年めにくびになった。義父への手前、表向きは依願退職という形ではあったが、くびに変りはない。職務に不熱心で他の社員が果す業務にまで支障を及ぼすとさえ社長は伸彦にいった。

来客は帰り始めた。

伸彦はガラス越しに自動車の列が丘を下ってゆくのを見送った。赤い尾燈は市街を埋め尽した夥しい光の点に吸いこまれる。いくつかの足音が伸彦の背後を通りすぎた。そのうちの一つがにわかに立ちどまった。伸彦はじっとしていた。かすかな衣ずれも耳にしたように思った。向いあっているガラス壁にぼんやりと映っている女の姿を見ていた。

香水が匂った。記憶にある匂いである。足音が近寄った。女は短い言葉を伸彦だけに聞えるようにつぶやいて歩き去った。伸彦は佐和子をのせたタクシーが門を出てゆくのを見とどけてから向き直った。手には火の消えた煙草を持っていた。ボーイたちが広間のテーブルを片づけにかかった。アルコオルと煙草と料理の匂いがまざりあって、客が去った今も息づまりそうな感じは変らない。

「お待たせしました、こちらへ」

菊池省一郎が玄関の方からやって来た。新社長は胸のリボンを歩きながらはずして、なげやりな身ぶりでそれをかたわらのテーブルに置いた。広間から廊下に入り、突きあたりの階段を上った所へ伸彦は導かれた。六畳ほどの洋間である。ニスの匂いがした。まだ一度も使われたことがない部屋のような気がした。絨毯も新しく、ソファも新しかった。

菊池省一郎は肘掛椅子に深々と身を沈めた。パーティーが予定よりも永引いてしまって、と弁解がましくつぶやく。

「いい会でした、お客を見物するだけで退屈しませんでしたよ」
伸彦は如才なくいった。
「そうですか、ぼくは退屈したな」
ネクタイをゆるめながらもう一方の手で机の送受話器をつかみ、伸彦を流し目で見やって、「何か飲みものは？」ときいた。自動車を運転して来ているから、と伸彦はいった。「ウイスキーと氷、それにコーヒーを持って来てくれ、二階の書斎に」女中が命ぜられたものを置いて部屋を出ていってからも菊池は両手の指先で目頭を押えて黙りこんでいた。伸彦は煙草を用意しなかったのを後悔した。テーブルにある灰皿とセットになった大理石の煙草入れは空である。壁の本棚には百科事典がひと揃いと「伊佐市市制五十年史」が一冊あるきり。マントルピースの上にゴルフトーナメントのリボンで飾られた優勝盃が雑然と並べられている。
「あなたのことで、さっき行武さんと話しました」
菊池はおもむろに身を起した。グラスに氷を入れウイスキーをそそぐ。伸彦の分もついだ。一、二杯だったら運転に支障はない。旧市街の路次を抜けて帰ればパトロールしている警官にも出会わない、といってすすめた。行武政憲は有明企画の社長である。伸彦はグラスを手にとった。
「いい社員だったとほめていましたよ、あなたがやめたのでわが社には筆の立つのが一人も居なくなったといってた」
行武は伸彦がパーティーに招かれたのを知っていたのだろうかと思った。壁ぎわに置いてある小さな棕櫚の鉢植えのかげに伸彦は立っていた。よほど近寄らなければ目立たない位置である。「いい社員」といった行武の真意を伸彦ははかりかねた。
「父に会ってもらうのが一番なんだが、あいにく半身不随でしてね、思うように舌がまわらない、耳は遠くなってもどうにか聞えるんです」
「重富さんから大体の所はきいていました」
「重富さんというと、大先生の方ですか」
菊池は上目づかいに伸彦をうかがった。疲れの色が濃かった四十男の顔に精悍な陰が甦った。息子の方だと伸彦は説明した。
「六十二歳といえばとうせつ働きざかりといっていい齢なんだが、若いとき南方でひどい目にあってるんで、それに復員してから無理のし通しが祟ったんだ、六十をすぎてから衰えがひどくなりました、寝てテレビを見るのが唯一の娯楽です」
菊池はグラスを両手で支えて椅子に深くもたれた。
「父の還暦祝いに書きためていた回想手記を本にしようと思い立ったんです、今までさんざん苦労させましたからせめてもの親孝行になればと思い立ちましてね」
「その原稿はいつ書かれたんですか」

「復員してから少しずつ書いてたようですな、ぼくはあんなものに興味ないから一度だって目を通したことはないけれど、でもここ十年ほどは書いていないはずです、最初に発病したのが五十二の齢でしたからね、あなた、お父さんは？」
「南方で戦死しました」
「本籍は確か……」
「東京です」
「南方はどの方面でしたか」
伸彦はソロモン諸島のGという島名をあげた。菊池の目が光った。実は自分の父もG島で戦ったのだといい、しばらく絨毯に目を落して考えこんだ。G島といっても、と伸彦は言葉を続けた。
「父は船に乗ってたんです、あの島で戦ったわけじゃありません」
「すると海軍ですか」
「陸軍ですが輸送船に配備されてたようです、詳しい話は知りません、父の最期も公報に書かれている以外は」
「あなたは親父とはまるっきり無関係な人だとばかり思ってたんだが、そうでもないようですな、まあいいでしょう、二年前だった、西海印刷に頼もうとして原稿を見せ、経費について相談したら、まずちゃんとした四百字詰の原稿用紙に書き写して全部で何枚になるか数えてみなければ単価の計算が出来ないという。便箋やらノートブックやらに書かれていましてね、あの頃まで父はわりと元気だった、で、書き直しは自分がやるといって張りきってたんだが社長をやめるに当ってぼくといろいろ引継ぎをしなければならない、そのうち病気が重くなって原稿どころではなくなったというわけです」
「そうするとぼくの仕事は原稿を四百字詰の原稿用紙に書き写すだけでいいんですか」
「初めはそのつもりだった。しかし伊奈さん、それだけのことだったら社の女子事務員にいいつければすむことです、あなたに頼むまでもない」
「たしかにその通りです」
「百枚かな二百枚になるかな」
菊池はつと立って机の抽出しからハトロン紙の大型封筒を取り出した。テーブルの上に中身をひろげた。クリップでとめられたり、こよりで綴じられたりした大小不揃いの紙片が、伸彦の目の前に重ねられた。白い紙片があり、黄色く変色した紙片があった。そのうちの一冊を伸彦はしらべた。番号がうたれていない。
「書き写したら何枚になるか見当がつきますか」
菊池がたずねた。二百五十枚を越えることはないだろう、と伸彦はうけあった。
「父がこれを書き始めたのはまだ太平洋戦争の正確な資料が出ていない頃でした。ところどころ間違いもあると思いますよ、文章の才能もない、俳句ひとつこさえない無風流


此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.